

Fate/EXTRA 奉納殿百二 十八層

ミズアメ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

跡形もなく消え去つた、余分な物語があつた。

月の裏側に落とされた“彼”とその従者は、幾つもの苦難を乗り越え、桜の迷宮を踏
破し、見事正史へと帰還を果たした。――けれど、そんな結末は願い下げだ。だから
今度は、成功するまで繰り返してみるとしよう。

月の裏側を舞台とした、聖杯戦争。

中枢へと至るに足る駒は一組のみ。

死に苦悶して流転するマスター。

死に接続して直視するサーヴァント。

互いに絡み合いながら、相克する螺旋で待つ。

* * *

オリ主の少年である巫条祈荒が、無銘のアサシンこと『両儀式』と共に、月の裏側で行われる聖杯戦争を戦い抜くお話です。基本的にマスター、サーヴァント共に既存キャラの流用がほとんどですが、若干の改変要素を含みます。ご注意ください。

目

次

予選：痛覚残留

01. oblivious |

02. この螺旋を越えて |

第一回戦：天魔失墜

03. 目覚め |

04. 戦いに挑む理由 |

夢幻

05. 夢幻 |

06. ユグドミレニア |

56 44 34 25

11 1

予選：痛覚残留

01. o b l i v i o u s

海のように青い空が、自分を見下ろしている。

見詰め続ければ泡沫のように消えてしまいそうな、そんな曖昧な天気だつた。

——眠い。

精巧な色彩に覆われた景色を一望しながら、欠伸交じりに口の中で呟く。

周囲には自分と同じように、眠たげに欠伸を噛み殺している姿が散見された。しかし直接文句を口に出す者は一人もおらず、胡乱げな瞳からは日々の強要された習慣に対する諦めが垣間見える。

我らが学び舎、朔良園学院の朝は早い。ミッショントスクールである当校では、毎朝——正確には特定の曜日にのみ——行われる礼拝儀式への参加が義務付けられているからだ。

「あら、今朝は眠そうですのね」

不意に、正面からそんな声がかけられる。お気に入りの生徒をたしなめるような口調のそのセリフに、自分は聞き覚えがあった。

自分と同じく修道服に似た制服を着ている少女——黄路美沙夜。切れ長の怜俐な目を瞬かせ、彼女はこちらを注視している。袖には生徒会役員であることを表す赤い腕章がつけられていた。

ふと気になり、周囲を見回してみる。校門周辺には、美沙夜と同じく腕章をつけた生徒が登校中の生徒を呼び止めて何やらチェックしているようだった。

今日つてなにかあつたつけ？

小首を傾げて尋ねる。すると、美沙夜はあからさまに呆れた、と肩をすくめた。

「あつたもなにも、先週の朝礼で今日から学内風紀強化月間だと発表されたでしょ？」

ふむ。そう言われば、そんなイベントがあつたかもしぬ。

まあ何はともあれ、この生徒会長殿はきちんとチェック項目を合格しない限りここを

通してはくれないのだろう。

「それは当然のことよ。美しい規律は正しい服装から始まるものです。何より私は生徒会の代表として指揮を執っているのですから、いくら長年の友人とは言つても甘やかしたりしませんよ？」

意地悪く微笑み、美沙夜はでは早速、と風紀検査を始めた。

襟や裾、ソックスなどの服装を手早く確認し、次いで間断なく鞄の中身を覗きこむ。当然、違反物の類は見つからない。頭髪や爪の長さも問題ナシだ。

「非の打ち所がないわ。徹頭徹尾文句なく、貴方は朔良園学院生徒の模範そのものの姿よ。誇つていいわ」

満足げに、それでいて誇らしげに微笑み、美沙夜は太鼓判を押す。

しかし一転して彼女は苛立たしげに眉をしかめると、周りで行われている風紀検査を一瞥して重く溜息を吐いた。

「それに引き換え、まつたく……。検査に引っ掛けた生徒は勿論そうなのだけれど、検査する側の役員まで気が抜けているようで如何ともし難いわ。どうやら雑に検査しているみたいだし」

まあ、チエック項目が多いみたいだからね。大変そうだ。

苦笑を交えて、労いを兼ねて声をかけてみると、すると彼女は、どこか恨めしそうな視線をこちらに投げかけてきた。

「正直、貴方のような生徒が私達運営側に加わってくれれば心強いのだけれど、ね。……あら、ごめんなさい。生徒会なんて、無理強いしてまで入つて貰うものではなかつたわ」
どこか取り繕うように誤魔化しながら、美沙夜は前言を撤回する。その普段とは違う拳動に少し違和感を覚えたが、まあ、特に気にするほどのことではないだろう。

分かつた、それじやあお勤め頑張つてくださいね、とうそぶき、美沙夜の横を通り抜ける。

簡素な感謝の言葉を背に、下駄箱のある昇降口へと向かう。その途中で聞こえた情けない悲鳴から判断するに、まじめな生徒会長に誰かが捕まってしまったのだろう。『愁傷様、と心の中で“誰か”に対し冥福を祈りつつ、自分は校舎の中へと足を踏み入れた。

日光を取り込み明るく照らされた廊下を歩き、目的の教室へと向かう。

流れるように自分の席へ座つてから、数拍の間を置いて、教室の戸が開かれる。

姿を現したのは、黒いスーツを着用し、黒縁のメガネをかけた穏やかな男性だつた。

「おはようございます、皆さん。今日も時間通りに全員揃つているようですね、結構」

男性——玄霧先生は教室全体を見渡し、柔らかく表情を綻ばせる。

玄霧先生は二年D組の担任だ。以前は葉山という名の教師が赴任していたのだが、彼は最近唐突に行方不明になつてしまつたらしい。理由は不明だ。何かの事件に巻き込まれたのではないかとの噂も囁かれてはいるが……真偽の程は判別しがたい。

しかし、そんな欠落に世界が揺らぐことはないようで。今日も今日とて、まるで何事もなかつたかのように朝の礼拝儀式が始まるようだ。

いつもと変わらない日常。些細な変化を繰り返す日々。

ありきたりな『いつも通り』の積み重ねが、今日もまた性懲りもなく始まつていく。

* * *

何もかもが、狂つている。

だつて、こんなの絶対におかしいだろう——？

「……まったく。何体いるんだ、こいつらは。いくら殺してもキリがない——！」
そんなのは知らない。どうでもいい。そもそも自分が望んでこんなことをしている
訳じやない。こんな地獄で、一体あと何度死に続ければいいんだ。

失敗シタ 失敗シタ 失敗シタ——！

他人の失敗を喜ぶ下卑た嘲笑と共に、体が歪んで溶けていく。熱された飴のように肉
が蕩け、バリバリと骨が変形した。

ソウダ ソウダ マタ 今度モ失敗シタ——！

無限に死に続けることで繰り返される。この死を突破するまで、無限に殺される。螺
旋のよう^{ゴル}に開始を見失つた終わらない聖杯戦争。その何度もかの今回が、こうして、無
様に——

終ワレ！ 終ワレ！ 真実を見口、違和感ニ目ヲ凝ラセ、決シテ逸ラスナ、アノいけ

好かないヤツの言うとおりにシロ！ ヤメロヤメロ！ 試せるコトはスベテ試せ！
 試した上でオレを殺しに来い、ヤメテヤメテ、殺さないデクレ！ 来るな、来ナイデ
 ヨウ、殺シニキタラ殺シテヤル！

——次の走者に呪詛だけを残し、すべてを失つて消え去つた。

* * *

——投げ出された人形のように、いつも通り目覚めは唐突だった。

まるで何事もなかつたかのように／事実何も起こつていない／日常は続いている。

「……眠い」

呆然と呟く。だが、今のこの感覚はその一言で表せるようなものではなかつた。とにかく、今すぐにどこか落ち着けるような場所に向かいたい。

日増しに大きくなる頭痛は、既に許容できる範囲を大きく超えていた。今では絶叫しながら床を転げ回りたいほどに悪化している。まるで、何かの呪いのようだ。

——痛い、イタイ、いたい

「あら、今朝は眠そうですのね」

聞きた／何度聞いたか分からぬ／お気に入りの生徒をたしなめる様な声。そ
 の一切を無視して、学校の敷地へと足を踏み入れる。

「あつたもなにも、先週の朝礼で今日から学内風紀強化月間だと発表されたでしよう?」

対象を失つても勝手に続く小言を気味悪く思いながら、そそくさと奥へ進む。

どこに向かいたいのか、どこに向かつているのか。自分でも分からぬが、きっとこの道で合つてゐるはずだ。通い慣れた路を、今更間違える道理はない。

豪奢な噴水や絢爛な花壇には目もくれず、中庭を横断する。

その途中で、目の前に立つ誰かに呼び止められた。

「おはよう、いい朝だね」

やあ、と片手を掲げ、こちらに爽やかな笑みを向けてくる。

自分と同じ学院の制服を着た、大人しそうな顔をした人だ。彼は自分よりも一つ上の学年に在籍する上級生で、確か、名前は白純理緒……だつただろうか。

「おはようござります、白純先輩」

普段なら／この螺旋においても／まず会うことのない人物。その出会いにどこか自然としないものを感じながらも、自分は挨拶を返した。

「あは、辛そだね。体調が悪いなら保健室に行つた方がいい。こんな世界だ、自己のメントナンス
健康管理は欠かせないからね」

労わるような柔らかな笑みを浮かべて、白純先輩は優し気に言う。

体調が悪いのなら保健室へ——なるほど、確かにもつともな意見だ。しかし今は

そんなことをしている場合ではない。向かわなければならぬ場所があるのだと、頭痛と共に湧き上がる混沌とした衝動があつた。

「そうか……行きたい場所が、あるんだね？ それなら用具室に向かうといい。きっと君の望むものがそこにある。——それじゃあ、僕はこれで。最後に君と話してみたかつたんだけど、それも叶つたから。そろそろ行くことにするよ」

擦れ違ひ様に肩を叩き、白純先輩は校門の方へ向かつていく。

彼の言うことはまつたく理解できなかつたが、とにかく用具室へ向かえばいいということは分かつた。なので、重い体を引きずつて用具室へと向かうことにする。

その前に一度だけ振り返るが、既に白純先輩の姿はそこにはなかつた。

用具室は校舎の一階、その最奥にあつた。——のだが、どういう訳か今は扉そのものがなくなつてゐる。まるで、ここには最初から何もなかつたかのようだ。

いや、もしかしたら本当にここには何も無かつたのかもしれない。——そう思いはしたが、ここで立ち止まることに對して肉体がすさまじい拒絶反応を示したので、渋々ながら壁を調べることにする。

恐る恐る、真新しい校舎の壁面に指を這わせる。すると、指が飲み込まれた。腕の突き刺さつた部分を中心にして壁にはノイズのようなエフェクトが走り、ズぶズぶと俺の腕を引き込んでいく。

だが、この程度で驚いている暇はない。何せ、これはこれで何度見たか分からぬ光景だ。問題はここから先、自分が生き残れるかどうかである。隠された扉を通過して、用具室への侵入に成功した。

薄暗い倉庫の中を見渡すと、——やはりあつた。デツサン人形のような外観の、華のない無価値なドール。従者のように追従してくるソレを鬱陶しく思うが、しかしコレがなければ生き残れない。少なくとも、自分はそう直感している。

——真実とか、日常とか、そんなことはどうでもいい。

重要なのは、残留するこの頭痛を消すこと。その為には、前へ進まなければならぬ。

* * *

長つたらしい前置き^{チユートリアル}を無視して、一気に最奥へと突き進む。

辿り着いた終着は、やはり荘厳な空間だった。精霊が宿る、息苦しいまでに神々しい広間。そこには予想通り、幾多の朔良園学院の生徒達が倒れている。

最早見慣れた光景。ならば死骸の傍に崩れているドールが立ち上がり、こちらへ襲い掛かつて来るのもまた必定だった。

』

こちらへ接近するドールに合わせ、自分のドールも前へ出る。どうやら、こちらを守る氣でいるらしい。だが、頭痛と既視感がどうしようもなく如実に訴えている。曰く、

期待はするな、と。

斯くして——半ば予想通りに、自分のドールはいとも簡単に敗れ去った。

無意味な戦闘と無価値な敗北。些かいつもと状況が異なつてはいるが、しかし結果が変わらないなら特に気にする必要もないだろう。

どうせ、ここで終わる。死を積み重ねる螺旋は不偏だ。この物語は、永遠に始まらない。

そう結論付けて。——自分は、ここで諦めることにした。

02. この螺旋を越えて

血のよう赤い空が、自分を見下ろしている。

以前の空がどんな色をしていたのか、既に思い出せなくなつていた。

ああ——今回も、痛覚が、残留している。

[]

この状況に相応しい言葉がなんだつたのか、分からぬ。そもそも眠気なんて頭痛のせいで消し飛んでいる。

- 1 -

最早何を言つてゐるのかも分からぬ。そもそも、彼女が誰なのかすら認識できぬ。

ともかく、今はさつさと進むべきだ。幸いにもこのイベントは無視しても何の問題もない。路上に乱立する肉塊じみた何かの横を通り抜けて、どこかへと向かう。

目に映るモノや聞こえるモノ、その全てを正しく認識できていないが、道順や手に入れるべきものは体が覚えている。頭痛と既視感に目が回るが、そんな些事で足を止めるべきではない。

どこかモニターの画面越しに風景を見るような、奇妙な視界。それでもないよりはいいと思う。少なくとも、闇雲に手探りで進むよりはマシだ。

校舎の一階の端——不気味なほどに無音な廊下を歩き、辿り着く。そこには予想通り、用具室の扉があつた。半ばもたれかかるように無機質な戸を押し開けて、中へと入り込む。

薄暗い倉庫の景観に注意は向けず、ただドールの従者を連れて奥へと歩を進めるのみだ。

——ようこそ、新たなマスター候補さん。

どこからともなく響く声を無視して、ただ奥へと進む。足を動かすのは使命感でも運命めいた直感でもなんでもなく——ただ、この残留する痛みを取り除きたいという願いだけだ。

この先に、頭痛の原因がある。

この先に、違和感の正体がある。

この先に——自分の願いを叶える為の、奇蹟がある。

なぜか、そう確信している。そしてその確信だけが、俺を支える唯一の原動力だつた。本来なら、とうの昔に発狂しているだろう。目が覚めた瞬間に、首を括つていたに違いない。それほどまでに、此処に“在る”というのは、苦痛でしかなかつた。

だがそれをしないのは、目の前に希望をチラつかされているからだ。まるで届かない人参を食おうと必死に走る口巴のよう。きっと、俺を見ている“何者か”は今の俺の滑稽な様子を楽しんでいるに違いない。もつとも、そんな性悪がいればの話だが。あるいは空想を思いつつ、永い廊下を歩く。透明なガラスを繋げたような外観だが、しかし見える景色はただ一色のみである。凧いだ海を思わせる鮮やかな青——その先にある到達すべき地点を目指し、緩やかに下る廊下を駆け抜ける。

きっと、今度こそ——でなければ、一体、あと何度

* * *

辿り着いた場所は、やはり莊嚴な広間だつた。

並び立つステンドグラスのような構造体オブジェクト。それに包まれるようにして眠る、朔良園学院の制服を着た生徒達。そして——断たれた糸を繫げ上げ、立ち上がる無貌のドール。

』

こちらを目にするや否や、ドールがこちらへと肉薄する。当然、俺はそれに応じた。自らのドールを前線へと突貫させ、敵対するドールと死闘を演じさせる。

お前を倒せば、この螺旋も、きっと——！
かつてないほどの激情を込めて、襲い掛かるドールを睨み付ける。だが、それでは駄

目だ。このままでは駄目なのだ。何も考えずに突っ込むだけでは、いかに相手が単調な思考しか持たない人形であろうとも、決して敵いはしないのだから。

頭痛に耐え、ドールに指示を飛ばそうと躍起になる。しかし、既に遅かつた。形勢は相手が有利なまま覆りそうにないし、覆すためには明らかに数手足りない……！

敵性ドールの放つた蹴りが、俺のドールを貫いた。鋭利な爪先に腹部を貫かれ、床に崩れ落ち動かなくなる。それこそ糸を断たれた人形のようだつた。

ドールが討たれたと同時に、こちらの肉体もがくり、と膝から崩れ落ちる。どうやら、俺とあのドールは命か何かを共有していたらしい。ならば、ここで俺が倒れるのは当然だろう。

また、目覚めるのだろうか。

また、繰り返すのだろうか。

また、頭痛は増しているのだろうか。

また、視界は潰れているのだろうか。

また、

——また、俺は死ぬのだろうか？

「…………ツ」

凍つた心臓が、強く脈打つ。痺れる手足に冷たい血が通つた。
 しかし所詮それは死んだ肉、死んだ魂。何があろうと、自分が敗北し死亡したという
 事実は変わらない。如何に心臓が猛り血液を廻そうとも、如何に脳が筋肉に動くよう命
 令を下したとしても。この身が滅び潰えた現実は、決して変わり得ないのだ。

——ならば、何を足搔く必要がある？

どんなに繰り返したところで、どうせここから先には進めまい。当然だ。幾度も繰り
 返した結果がこれなのだ。今更やり直したところで、何かが変わる筈がない。

もう、疲れた。これ以上は、頭痛にも眩暈にも耐えられない。ここから先は、一步も
 進めない。何があろうと、何も変わらない。——結果は出た。俺には、何もできない。

いや。

だから、なんだ……！

「…………ツ！」

痺れる指に血が通う。凍つた心臓は、既に熱さを取り戻していた。収縮した脳が血で
 膨らみ、まともに考える余地が生まれる。噛み締めた奥歯が碎けたような気がするが、
 そんなことは心底どうでもいい。

最早執念——あるいは、怨念しか頭にない。ここで“また”死ぬというのなら、この頭痛に耐えたのはなんのためだったのか。ここで朽ちる彼らは、一体何のためにここまで来たというのだ。

——立て。でなければ、せめて考えろ。恐くとも、痛くとも、それくらいはまだできる。

立ち止まるな、立ち止まるな、立ち止まるな！ ここで諦めることの意味と訪れる結末を、よく考えろ！ でなければ、それこそ俺にも彼らにも、救いがないじゃないか……！

こんなところで、挫けられるか。

こんなところで、死んでいられるか。

こんなところで、誰が朽ちてやるものか。

こんなことで死ぬなんて、あまりにもバカバカしい！

だつてこの手は、まだ一度も、自分の意志で戦つてすらないなのだ。だと言うのに——

——誰が、諦められるものか……ッ！

——あなたの願い、しかと聞き届けました。

異色ではあるけれど、ここに縁を結びましょう。私があなたの剣となります。だか

ら、そんなところで眠っているのは損よ、無名の君。さあ、顔を上げて、耳を澄まして

不意に、虚空から高らかな声が響く。

空虚でいて柔らかな声。頭に直接響くそれは、なぜか——ひどく、心地よかつた。
『まつたく。「S E · R A · P H」の裏側まで来て、やつと諸悪の根源を見つけたと思つたらこれだ。まさか、こんな面倒ごとに巻き込まれるなんて思つてもみなかつた。ただ死ぬだけの死体なら放つておくところだけど……ダメだな、そんな眼で誘われちや断れない』

氣怠げな囁きが、より近い位置で耳を打つ。男のような荒っぽい口調だが、それは鈴を転がすような少女の聲音だった。

『いいぜ、丁度掃除にも飽きてたとこだ。

この夢が終わるまでのひと時、おまえに付き合つてやる——！
瞬間、全身に強い熱が走る。

それが糧となり、俺は——巫条祈荒ふじょうきあらは、完全に目を覚ました。

同時に、周囲を囲むステンドグラスが碎け散る。切り開かれる甲高い音と共に、天から光が降りた。スポットライトのような眩い光源の中心に、何かがぼうつと浮かび上が

りつつある。ソレこそが、俺の——俺が目覚めることを望んだ、『誰か』だつた。

——

俺の呆然とした視線にも構わず、彼女はただ凛と佇んでいた。

外見はほとんど人間と変わらない。だが、明らかに違つてゐる。今まで自分が見てきたヒトガタのモノなんて、比べものにもならない。あるいは、彼女こそが『本物の』人間なのかも知れない。

雪か桜の花びらのように、光の欠片が舞い散つてゐるその中央。一人の少女が具現している。

天光に塗れる黒絹の髪に、いつそ空虚に近い氣怠げな瞳。浅葱色の着物の上に赤い革製の上着(ジャンパ)を羽織るという和洋折衷の衣装に身を包んだその威容に目を見張る。

けれどもつと、心惹かれるものがある。

無感動でありながら決して無機でないもの。まるで伽藍堂のように完成された静謐さ。矛盾したようなその二律背反の在り方は——間違ひなく。自分が知るものの中で、何よりも美しかつた。

「サーヴァント、アサシン。オレを喚んだ物好きはおまえか?」

こちらに歩み寄り、少女は簡潔に問うてくる。

刃物で刺されるように直視され、頭が熱でぐらつく。どうやら生き返つたばかりの肉

体では、今の状況 자체が相当な負担となつてゐるらしい。すぐに答えることができないなんて、あまりにも無様だ。だが当の昔に喉が鏽びついていることを考慮するならば、まだ応えられるだけマシだろう。

少女の言葉に、俺は静かに頷いた。

「そう、なら契約は成立だ。……にしても、ヘンな挨拶だ。なんでこんな決まりがあるんだか」

呆れたように小首を傾げながら、少女がこちらに手を差し伸べる。

俺はその手を取り、立ち上がった。すると握られた手が発熱する。……鈍い痛み。けれどこんなもの、あの頭痛に比べれば虫刺され程も気にならなかつた。

問題なのは、そこに奇妙な模様が刻印されているということ。

毛羽だつた渦巻のような三画の紅い紋章が、刺青のように、左手の甲の皮膚に染み込んでいた。

呆気にとられ、目の前の人物と左手を交互に見比べる。この僅かな時間の間に一体何が起こっているのか、てんで予想がつかなかつた。

けれど混乱したまではいられない。背後でカタリと音が鳴り、振り返つてみれば、先程戦つたあの人形が身構えていた。

惨敗を思い出し、思わずたじろぐ。

しかし傍らに立つ少女は違つた。まるで俺を護るように、彼女は素知らぬ顔で前へ出る。

「殺し合いを直視するのはオレの領分だ。お前は下がつて、戦いを俯瞰してろ」
少女がぶつきらぼうに言い放つ。その手には一振りのナイフが握られていた。
刃渡りはおよそ六寸程度。反りを持つ片刃のそれは、刀というよりは刃そのものだつた。

』

爪先で床を蹴立て、ドールが少女へと肉薄する。

あの人形の総身は須らく凶器だ。手先爪先は槍となつて肉を穿ち、振るわれる四肢は鞭となつて骨を碎き内臓を破壊する。そしてその動作速度モーメンションは風のように速く、とても人間に見切れるものではない。

だから俺は、今まで何度もこいつに敗北を喫してきた。

当然だ。見えない技を迎撃することなんて、俺にはできない。頭痛で思考力が麻痺しているのも、それにより拍車をかけていた。——何があろうと、俺ではあの敵を倒せない。どのような奇蹟を想定しても、この事実だけは最早絶対に覆せはしないだろう。

ああ、けれど――目の前に立つ、彼女ならば。

「動く人形か……そこに転がってる奴らと同じだな。ああ――本当にいろいろする」

無感情に視えた少女が、明確に嫌悪を剥き出しにして吐き捨てる。心底うんざりする、と。

物思わぬ人形はその様をどう捉えたか。猛るように加速して、突撃槍^(ラング)にも似た貫手を少女の胸^{アブジエクト}目掛けて突き出す。如何なる構造体^{オブジェクト}をも貫く突撃が放たれた。

しかし、人形が穿つたのは虚空のみ。少女は人形の動きを完璧に見切り、あえて先手を譲ることで、後の先にて迎撃を実行する。

「死の塊が、オレの前に立つな————。」

それは非の打ち所のない、鮮烈な一撃だつた。

少女の持つ刃が、人形の胸を貫く。針のように、剣のように、雷のように鋭い閃光が、肉と肉の隙間——ドールの電腦体を構成する靈子と靈子の合間を縫い、まるで当たり前のように貫通してみせたのだ。

傷口から溢れる死の奔流。それに飲み込まれ、ドールの体が崩れ落ちる。少女はその遺体を無造作に放り捨てた。

虫に食まれるようにして、ドールの総身が白いノイズに覆い尽くされる。バラバラに欠片を飛ばして散らばる様は、通常の消滅^(デリート)とは明らかに趣が異なつていた。夢げに崩れ、散華するその姿は、肉の腐り落ちた骨か、あるいは百合の花のようにも見える。

「痛つ——やつぱり、この体じや眼を使うのにも一苦労だな」

苦痛に目を細めて額を押さえ、少女が苦悶を滲ませる声でひとりごちる。けれどその声は、言葉として俺の脳に届かなかつた。

頭痛は炸裂する針のようにより一層鋭さと範囲を増し、左手に宿る印が灼熱でもつて肉を炙つてゐる。その焼き鏝を押し当てられたかのようなに激痛に、意識が白く焼き焦がされた。

限界を迎えて意識が遠のくと同時に、下半身が制御を失う。

俺は膝を突き、床に崩れ落ちた。周囲に散乱している死体と同じように黙つて虚空を見つめる。しかし彼らとは違つて、俺はまだ生きていた。

痛みは即ち生の証。生きている実感が、全身を苛んでいる。

——痛い、イタイ、いたい

「苦しいか」

ぽつりと零された声に反応し、茹る意識が少しだけ活力を取り戻した。

俯せの身体をどうにか仰向けてにして、頭上に目を向ける。するとこちらを見下ろす少女と視線がかち合つた。

蒼い光を灯した黒瞳が、じつと俺を直視してゐる。

「痛かつたら痛いって言えばよかつたんだ、おまえは」

その言葉は神託のように、巫条祈荒の体の内へと響き渡った。

思えば、俺はこの症状を誰にも話したことがなかつた。体内に際限なく増していく頭痛も、螺旋のように積み重ねられる無数の死も。全てに耐えて、耐えて、耐えて、その果てに自壊しようとしていた。それこそが自分の最期なのだと、心の奥底で信じて疑わなかつた。いや、きっと今でもそれは変わらないのだと思う。

自分は必ず死ぬ。幾重にも積み上げられたこの結論は、最早変えられない。けれど……もしも、もつと早くにこの痛みを誰かに訴えることができていたなら。そして、それを聞き届けてくれるヒトおもうがいてくれたのなら——きっと、それだけでおれたちは救われるのだと、そう願う。

そして、彼女はそこにいる。

今までで唯一、巫条祈荒の訴えに耳を傾けてくれた、ただ一人の少女が。

こんなにも遅くなつてしまつたが——

そうだつたのか。ああ——なら、安心だ。

咳きは、しかし声にはならなかつた。

痛みは微塵も治まらない。むしろ強くなる一方だ。

しかしそれに反して、意識は潮のようにゆつくりと穏やかに引いていく。

今にも死んでしまいそうな心地。その安寧にどっぷりと浸りながら——次に目覚め

たときには、この螺旋を抜け出させていたことを願つて。俺はそつと、自らの意識を手放した。

第一回戦：天魔失墜

03. 目覚め

泥濘の日常は水底へ消えた。

魔術師による私欲の生存競争。

運命の車輪は奈落の底へ転がり落ちる。

——最も弱き者よ、ただ推して進め。

その命を無駄にして得た、己の価値さえをも無駄にしない為に。

* * *

——有り体に言うならば。

其処は、ただの牢獄だつた。

闇と深い蒼の天幕以外に、見えるものはなにもない。それだけが、自分に与えられた唯一のもので。だが逆に言えば、それ以外のすべてを自分は一度も目にしたことがなかつた。

産まれてからずっと、自分はこの檻の中で飼育されてきた。

一応、理由は知っている。生まれつき体が弱く、その上不治の病に犯されていたから

だ。

余人は皆、可哀想だと自分を哀れむ。——だが、それだけだ。

余人は皆、自分を悪魔だと弾劾する。——一体、何を根拠に。

余人は皆、助けてくれと自分に縋る。——何も、しなかつた癖に。

檻の扉は開いたまま。しかし、外へ出る手段はない。自分を外へ連れ出そうという“誰か”も、自分の周りには存在しない。あるのは食い合うように絡み合う影絵ばかりだ。

彼らはいつも、壁を隔てた向こう側で互いを貪り合っている。踊る肉影と響く嬌声には、こちらへ見せ付けるような意図さえ介在しているように思えた。

だが所詮、そんなものは檻の外の出来事でしかない。

何者も干渉しない、時折愚者が覗き込むだけの鳥籠。それこそが、この伽藍の在り方だ。

誰もが皆、自分を哀れなのだと嘲笑う。

誰もが皆、自分こそが正しいのだと訴える。

誰もが皆、自分はここにいていいのだと安心する。

だが、そんな都合は知らない。自分は、この闇と深い蒼の天幕以外は何も知らない。居るのは愉快な愚者と、哀れな暴徒と、馬鹿な信徒だけだ。——だから、きっと。

この世界に人間と呼べるモノは、もう、ドコにも

?"

忘れるな。

牢獄の中で、自分は産まれた。

その意味を

どうか、貴方だけは覚えていて

* * *

いつも通り、目覚めは唐突に訪れる。

しかし、今日のそれは普段のものとは明らかに異なつていた。

……頭痛が、消えている？

うつすらと目を明けて、呆然とそんなことを呟いてみる。なぜかは分からぬが、なんだかそれがとても感慨深いことのように思えたからだ。

無言で上体を起こし、周りを見渡す。どうやら自分はベッドに寝かされていたようだ。それに周囲を区切る白いカーテンから推察するに、此処は保健室であるらしい。

痛まない頭を摩りながら、どうして自分がここにいるのか考える。意識を失う直前

に、確か、自分は

——何も、思い出せない。

「ようやく起きたか」

不意に、横から声を投げられる。カーテンによつて区切られた空間の内側に、いつの間にか一人の少女が当然のように佇んでいた。

冷たい光を宿した瞳が、まっすぐに俺を見下ろしている。その姿を目にした瞬間に、息が詰まるような、ひどい圧迫感を胸に感じた。

そうだ——自分は、彼女のことを覚えている。

サーガント従者を自称し、暗殺者アサシンと名乗った彼女。その和洋折衷の装いと、どこか色味が薄く感じる佇まい。そしてこちらの魂を見据えるような玄い瞳の眼差しは、忘れようと思つても中々忘れられるものではないだろう。

「中々起きないし人形みたいに青ざめてたから、死んでるのかと思つたけど。これで少しはマシになつたな。でも空っぽな顔は変わつてないままか……おまえ、自分の目的とかちゃんと覚えてる？　せつかく聖杯戦争の本戦に間に合つたんだ、もう少ししゃつきりしたらどうだ？」

アサシンはベッドの柵に凭れかかると、横目でこちらを見下ろしながら呆れた風に言つた。

……今の台詞は顔を洗つて眠気を覚ませ、的な意味なのだろうか。しかしその割には意味が通じない部分があるような気がする。というか単刀直入に言つて、聖杯戦争つて、なんだ?

素朴な疑問を正直に口にしてみる。すると、アサシンはいやそうに顔を顰めた。

「聖杯戦争を知らない……?」

メモリー

記憶の返却に不具合でもあつたのか? いや、ムーンセ

ルがそんな不手際を起こそとは思えない……」

軽く握った手を口元に当て、アサシンはひとり思案にふけつてしまつた。おかげでこちらは疑問が氷解せずに頭の中に残つてしまつものだから、なんだかとてもムズムズしてしまう。なので状況を開拓すべく問い合わせを投げようとして、しかしその直前に躊躇した。

彼女の名を、何と呼ぶべきなのだろう。

彼女は自らをアサシンと名乗つた。その意味は即ち暗殺者である。女の子に対する呼び名としては、あまり相応しいものとは言えないだろう。

自分は少し悩んだ末に、躊躇いがちに口を開いた。

あの、姉さん……?

「……わかつてる。面倒だけど、説明はちゃんとする。だからその呼び方は二度とするな」

アツハイ。

アサシンの物理的に射貫かれない視線に晒され、自分は一も二もなく全力で頷いた。

それからアサシンは、聖杯戦争の概要を滔々と語った。

聖杯戦争とは、聖杯を巡る闘争全般を指す、ある分野の専門用語なのだという。景品として聖杯を競るのであれば、それが例えオーケーションであろうと聖杯戦争と呼称される。そんな無数にある聖杯戦争の内の一つに、自分は参加することになつてしまつたらしい。……いや、実際には自ら参加することを選んだ、と言つた方が正しいらしいのだが。

「（こ）は地球じゃなくて月——ムーンセル・オートマトンの内部に造られた、靈子虚構世界『S.E. R.A. P.H.』だからな。おまえ達魔術師は自分の魂を靈子化することで（こ）に接続（アクセス）して。もちろん自分の意志でだ。じやなきやここには来られない」

なるほど。自分の意志で、か——まつたく心当たりがないのですがそれは。

「知らないよ、そんなのはオレの知つたことじゃない。あとでムーンセルにクレームでも入れろ」

「——残念ですが、当ムーンセルでは一切のクレームを受け付けておりません。全て試練と思って、受け入れると良いでしよう」

言と重なるように、シャツと鋭い音を立ててカーテンが開かれる。

木造の内装の中、白く統一された医療設備が目を引く。懐古的でありますながら清潔感に満ちた空間。それらを認めた瞬間、ツンと刺すような臭いが鼻先を掠めた。

清潔な空間。その中でも殊更、穢れとは無縁そうな二人の少女がカーテンの向こう側から姿を現した。

片方の小柄な少女はアルビノ——というのだろうか。彼女の肌と髪は、陶磁器のように白い。彼女が纏う雰囲気は実に空虚で、色彩に乏しいアサシンと近しいものがある。それが自分と同じく修道服に似た朔良園学院の制服を着ているのだから、ほんの一瞬だけ聖女か何かなのだろうかと錯覚してしまつた。

錯覚——ああ、確かに錯覚だろう。なんたつて彼女の瞳にある輝きは、アサシンのそれとは違つてあまりにも嗜虐的に過ぎる。

どちらかと言えば、彼女の隣に立つ人物をこそ聖女と呼ぶべきだろう。
というか……あれ？ 彼女つて割と本当に本物の聖女なのでは？

瞠目し、白い少女の傍らに従者のように佇む女性の姿を、自分は凝視する。

紫衣と銀の鎧に身を包み、淑やかに体の前で両手を重ね、じつとこちらを見下ろして
いる立ち姿。歴史に疎い自分でも、流石に彼女のことは分かる。朔良園学院は聖堂^{ミッショ}教会
系の学園だ。聖杯と同様、彼女の伝説とその容貌は、聖人として美化され学業の一端と

して語られていた。

聖女、ジャンヌ・ダルク。

救国の英雄でありながら、最期には魔女として火刑に処された女が——何故かそこに、いた。

「彼女はルーラー。此度の聖杯戦争において裁定者の役割を負つた、私のサーヴァントです」

混乱が顔に出ていたのか、白い少女が淡々とその存在を語った。

彼女に曰く——サーヴァントとは、かつて地球上に存在した英雄達、その再現なのだという。その存在はムーンセルが観測してきた史実を元にして『S E. R A. P H』内部に個人の人格として再現し形作られた、一種の使い魔であるとか。

そして当然、使い魔を操るのは魔術師（ワイザード）の仕事である。

「改めまして——本戦への出場、おめでとうございます。貴方は聖杯戦争に参加するマスターとしてムーンセルから認められ、サーヴァントを与えられました。よつて貴方にはこれから聖杯を巡るトーナメント形式の殺し合いに強制参加して頂くこととなっています。私はその監督役であり、貴方の健康状態を管理する為に用意された上級A I——言峰花蓮（カレン）と申します」

どうぞよろしく。

丁寧に頭を下され、釣られて自分も礼を返す。その様子を、アサシンとルーラーが無言で見守っていた。

自分達は下げていた頭を上げ、互いに口を噤む。

決して短くはない沈黙が場を満たした。到底、軽々に口を開く事が許されなそうにない雰囲気の中、不意に自分はぽかんと口を開けてしまう。

——えつ、殺し合い？

その発言、あるいは自分の顔が余程間抜けだつたのだろう。言峰はひどく冷めた目で嘲笑し、アサシンは溜息を吐いた。

04・戦いに挑む理由

見慣れた朔良園学院の廊下を歩きながら、思索に耽る。

サーヴァントには役割クラスがあり、その数は全部で七種類セブンクラスあるという。
剣士セイバー、弓兵アーチャー、槍兵ランサー、騎兵ライダー、暗殺者アサシン、魔術師キャスター、狂戦士バーサーカー。

この七騎の一騎を率いるマスターとして、128人の魔術師が殺し合いの闘争を繰り広げるのだという。そしてどうやら自分は、その中の一人として登録エントリーしたようだ。その時の記憶が失われたままなのが悔やまれる。少なくとも、今よりはもつとマシな覚悟が出来ただろうに。

いや——今となつては、その推測が成り立つかどうかすら怪しいものだつたが。言峰花蓮に曰く、自分の記憶は既に返却された状態であるらしい。

つまり、今の記憶がない状態こそが通常の自分なのだ。それがどういう意味を持つのか考えようとするのだけれど、その度に思考に霞が掛かつてなにもかもが曖昧になつてしまふ。まるで目の前が真つ暗になつてしまつたかのようだ。

……我ながら、ひどい逃避だ。
訳が分からぬまま、そう自嘲する。

覚束ない足取りで、自分は学院の廊下を歩いていた。そして視界の隅に入つた階段へ、特に理由もなく足を向ける。

傍らには常に靈体化したサーヴァント、アサシンの気配があつた。

意味のない散策に対して、彼女は特に何も言わない。一応、事前に予選の時と変わつている場所があるかも知れないから見て回る、なんて言つておいたことが功を奏したのだろう。ただ不機嫌そうな気配を送つてくるだけに留めてくれていた。

その対応は正直、かなり有り難い。心の整理をつけるには、まだ少しだけ時間がかかりそうだつたから。

二階、三階を無視し、屋上へ出る。

視界一杯に蒼穹が広がつた。地平線まで続く青空は、ひどく地表から近い場所にあるようを感じる。0と1の羅列が並ぶ虚空は作り物めいていて、なんとも言えない閉塞感があつた。

迷わずここまで来てしまつたが……自分は、何をするつもりでここまで来たのだろうか。

答えを出してはならない問いをぼんやりと思いながら、自分は眼球を転がす。すると妙な人影が視界に入り込んだ。どうやら先客がいたらしい。

校舎内で度々見かけた他のマスター達とは異なり、彼女は学院の制服を着ていなかつ

た。それどころか彼等や自分のような、型にはめたような外観もしていない。

肩に掛かる長い黒髪と、勝気な青みがかつた黒瞳が目を引く。どうやら自分と同じ東洋人のようだ。彼女は糊の利いた白いシャツをネクタイで結び、その上から艶脂色のベストを纏っている。時折吹く風が、膝まで覆う灰色のスカートの裾を僅かにはためかせていた。

服装は変わっているが、その横顔には見覚えがある。黒桐鮮花——自分と同じく、朔良園学院の生徒だった少女だ。学年は一つ下の一年生で、その時は学年一の成績を誇る淑やかな兄想いの才女、という触れ込みで名を馳せていたが、今の彼女にその頃の面影はない。

彼女の瞳に宿る意志の光はあまりに強靄だ。ここに来るまでに見かけた者達や自分とは違つて、戦士の様相で靈子の構造物オブジェクトを睥睨している。

「ふうん……造りそのものは、予選の時と変わつてないみたいね」

彼女は真剣な面持ちで転落防止用の柵や壁、床をぺたぺたと触つている。ひとしきり撫で終えると、不意にその視線がこちらを向いた。

強い眼差しに射貫される。

その瞬間、自分はまるで蛇に睨まれた蛙のような心境に陥つた。当然だ。自分達は聖杯戦争の参加者なのだ、殺すか殺されるか、それ以外の結末は有り得ない。

けれどどちらの強張った心境とは裏腹に、ふつと彼女の表情が和らいだ。

「あら、ちょうどいい所に。ついでだし、キヤラの方もチエックしておこうかしら」

そう言つて、黒桐は手を伸ばした。

彼女の細く柔らかな指先が、頬に触れる。それは探るように表面を這い、時に強かに抓られた。

痛いのだが。

「体温も反応も忠実に再現されてるわね。こうなると人間より人間らしい……って、あれ？」

怪訝そうに小首を傾げ、黒桐は両手でこちらの体をまさぐつてくる。彼女は忙しく手を動かし、肩や腹を叩くように探つた。

痛いのだが。

「もしかして、N P Cじやない？ マスターの一人なの？ 嘘でしょ…………つてうるさいわね！ 人のことを冷静に痴女だのなんだのと！ わたしにそんな趣味がある訳ないでしょ！」

青褪めたかと思えば、彼女は唐突に顔をカツと真っ赤にして虚空に向かつて怒鳴り散らした。恐らくそこに彼女のサーヴァントがいるのだろう。先程の行動について、何かしら茶々を入れたものと見える。

「まつたく、本当にいつも余計なことばかり言うんだから。一言多いのよあんたは。
……いや、別に今のはアドバイスじゃないわよ」

頭痛を堪えるように蟋谷を指で押さえ、黒桐は深く溜息を吐いた。

「んんっ——先程は失礼しました。まずは謝罪を。ムーンセルが用意したNPCと誤解してしまったものですから。……はあ、やつぱり改めて見ても信じられない。覇気がないというか、影が薄いというか。まさかとは思いますが、予選での学生気分が抜けなさ過ぎて、ファイル記憶の解凍に不備が生じているのでは？」

心底呆れた、という様子で黒桐が言う。その語調こそ嫌味めではいるものの、どうにもどこか憎めない感が強かつた。恐らくは先程の狂態のせいだろう。常に冷静であろうとするものの、その実率直に感情を表にしてしまうから、そのアンバランスさが可愛らしく映るのだ。

もつとも、それでなくとも彼女の指摘は当たっているのだから、怒りようも憎みようもない。

記憶に不備があるのは事実だし、自分がこれから行われる殺し合いに対しても真摯に向き合っているかといえば、そういう訳でもないのだから。

特に言い返すこともしないと、黒桐は不機嫌そうに眼を細めた。

「ますます呆れた。——行くわよ、ランサー。ここにはもう用はありません」

興味を失くした猫のようにぶい、と顔を背けて、彼女は踵を返して歩き出した。開け放されたままの扉を潜り、塔屋の中へと姿を消す。

その後ろ姿が見えなくなるまで見送る。

斯くして、屋上には自分以外に誰もいなくなつた。靈子で形作られた空間に無言で佇む。まるで世界中で自分一人だけが置き去りにされてしまつたかのような、そんな訳の分からぬ感慨が胸を締めていた。

無論、そんなものは錯覚だ。階下にはまだ平穏があり、傍にはサーヴァントが控えている。けれど今の自分の中はあまりに虚ろで、がらんどうだ。

網目状の鉄柵越しに、遠くまで続く俯瞰を見やる。

そこから一步踏み出したなら、きっと心地の良いものが待つてゐるだろう。少なくとも、この喪失感と孤独から解放されるのは間違いない。

牢からの脱出を祈る囚人のように、柵を掴む。

絡む指が細い鉄を歪め、ぎしり、と不快な音を立てた。

「それで、これからどうするんだ、おまえは？」

霊体化を解き、姿を現したアサシンが背後から問うてくる。

それに対し、自分は

一呼。

一吸。

胸の中にある煩わしいものを全て根こそぎ吐き出すように、殊更深く息を吸つて吐き出す。一種の自己暗示めいた儀式を終えてから、文字通り一転して自分は答えた。

振り返り、答える。

——戦うさ。まだ死にたくなんかないからね。

吐き捨てるように言う。

そうだ、自分はまだ死にたくないなどない。少なくとも、自分が何者なのかすら分からないままで消えるなんてごめんだ。きっと遠くない未来——この選択の行く末で後悔することもあるだろうが、そんなものは未来の自分に押し付けてしまえばいい。

こんな所で誰が死ぬか。

そんなもの死への憧れなんて、自分は持ち合わせていない。

ひどい自己嫌悪と馬鹿馬鹿しさに苛立つ。アサシンがいなければ、癪癩を起こしてめちゃくちやに頭を掻き落つている所だ。けれど何もしないまでは収まらないので、強烈に頬を叩いておく。

そんなこちらの様子がおかしかったのだろう、アサシンはくすりと、艶やかな微笑みを零す。

「そうでなくっちゃ。なんだ、ようやくらしくなつたじやないか、マスター？」
 アサシンの聲音が心なしか明るく聞こえる。自分はそれに首肯を返して、元来た道へと足先を向け歩き出した。

聖杯戦争の一回戦開始まで、今日を含めてあと七日。

決戦に挑む為には、アリーナと呼ばれる『S.E. R.A. P.H.』内部のダンジョンにて二つの暗号鍵を入手する必要がある。今日はまだ生成されていないようだが、それでも下見して大まかな構造を把握しておくべきだし、最低限、エネミーとの戦闘に慣れておいた方がいいだろう。

先程までとは打つて変わつて、暗く淀んで見えた視界は澄み渡つていて。霊体化したアサシンを伴い、自分は勇み足で廊下を歩いた。

その時ふと、自分の中とある疑問が鎌首を擡げる。

サーヴァントはかつて地球上に存在した英雄——それを記録したムーンセルが、靈子を用いて再現したものだという。ならばアサシンはどういつた伝承を持つ英靈なのだろう。

『残念ながらオレは英雄じやない。過去の人間には違ひないし、それなりに物騒な人生うのだが……。

顔立ちや体付き、それから着ている服装などからして、比較的近代の東洋人だとは思うが……。

を送りはしたけれど、ただそれだけだ。泡沫の夢のようなものだ。だからオレに真名はないよ』

素朴な疑問に対し、アサシンは靈体化したまま念話にて解答する。

英靈ですらない、無銘の何者か。そんな彼女がどういう因果で自分のサーヴァントになつたのか……なんて、問うだけ無粋というものだろう。

意識を失う前に垣間見たあの光景を、巫条祈荒は覚えている。

玄い髪を月光で濡らし、蒼く灯る瞳でこちらを見下ろすあの威容。強烈な頭痛の嵐の中で垣間見た神秘的な情景は、魂の根幹に刻まれるほどに、あまりにも美しかった。

だから、確信を持つて言える。

これから先、幾度地獄に落ちようとも——あの光景だけは、鮮明に思い描けるだろう。

知らず知らずの内に拳を固めつつ、階段を降りていく。三階、二階を経由して一階へ。床に足をつけ、階段を降り切った所で——自分は、呆然と目を見開いた。

保健室を退室した後、一度はここを通過した筈だが……どうやらあの時の自分は、相当思い詰めていたらしい。アレが一瞬でも視界を過つたなら、普通は立ち止まつて驚くに決まっている。ちょうど、今の自分のように。

そこにあるのは購買部だ。腰ほどの高さのショーウィンドウに区切られたそのス

ベースには、一人の女性が立っていた。

「何よ、人の顔をじろじろと……冷やかしならさつさと他所に行つて貰えるかしら？」
しつしつ、と猫でも払うように彼女は手を振る。

その端整な顔を見誤ることはない。教科書やらなにやらで、何度も見た顔だ。

控え目に言つて、エプロン姿が全く似合つていかない彼女は——黒い、聖女だつた。
グレたように真っ黒なジャンヌ・ダルクが、何故だか購買でアルバイトをしていた。

05. 夢幻

「…………温めるわよね？」

…………いえ、そのままで。

エーテルの欠片を電子レンジに突っ込もうとする黒い聖女に、何とか断りを入れる。サーヴァントが負った傷を回復させるアイテムらしいが、少なくともコンビニ弁当の類には見えない。温める必要はない筈だ。というか、そういう商品ではない筈だ。

黒い聖女は舌打ちを零し、エーテルの欠片をビニール袋に突っ込んで差し出してくる。

自分の口元がなんとも言えない形に歪んでいる自覚があるが、如何なる努力をしようと、どうにも修正できそうにない。それだけ目の前に広がる光景は強烈だった。

彼女の胸元に取り付けられた『研修中 じやんぬ・だるく』の名札がやけに眩しく見える。

黒いジャンヌ・ダルクという時点で致命的に謎だが、それがなぜ購買で働いているのか。自分には皆目見当もつかなかつた。

自分は目礼して商品を受け取つた。

どうしても彼女の存在を無視することは出来そうになかったので、つい勢いで買い物をしてしまったが……まあ、不要な買い物ではなかつたと思う。手持ちの資金が悲惨なことになつたが。

いや、この際財布事情はどうでもいい。それよりも本題に移ろう。彼女がなんなのか尋ねないことには、今夜は眠れない氣がする。

——イメチエンしたんですか？

「よく分かんないけどぶつ飛ばすわよアンタ」

「これ以上ないというほどに顔を歪めて、黒いジャンヌ・ダルクは言つた。恐らくは否定されたのだろう。つまり保健室で見た言峰花蓮のサーヴァント、ルーラーとは別人と考へるべきだ。うん。

その考へを裏付けるように、黒いジャンヌ・ダルクは言う。

「私とあのルーラーを一緒にするのは止めて貰えるかしら。確かに私はジャンヌ・ダルクですが、アレとはまた別人です」

真名は同じジャンヌ・ダルクなのに？

「ええ。元よりサーヴァントとは、その英靈が持つ一側面を役割に応じて分化し当て嵌めたものです。言うなればハードウエアとソフトウエアの関係というか……そうね、日本人なら分霊とか化身とか、和魂とか荒魂とか言えば多少は分かり易いかしら」

つまり貴方はジャンヌ・ダルクのアレな面が抽出され現界した、オルタナティブ的な姿だと？

「それで合ってるけど……アレな面つて何よ！ 本当にぶつ飛ばすわよ!! 私は悪魔にたぶらかされて世迷言を吐き、フランス軍を先導して戦争を巻き起こした悪い魔女よ！ 火刑に処されて世界を恨みながら死んだアヴェンジヤーよ！ なのに適材適所だとか抜かしてあの陰険女、私をこんな所に押し込んで！ 適所つて何よ、こちとらまともに学校にすら行つたことないもないので!? なんか文句あんの!?」

イエ、ナイデス。

黒いジャンヌ・ダルクことアヴェンジヤーの凄まじい勢いに押され、ぶんぶんと頭を振る。

人間の歴史、というものは観測する者によつて評価が変わるものだ。ちょうど日本の武将や皇族にも、英雄としての側面と怨霊としての側面、両方の伝承を持つ者がいるのだから、彼女もそういった類が独立したものなのだろう。

ジャンヌ・ダルクという人物は当時のフランス軍からすれば確かに英雄だつただろうが、戦後の彼女の扱いは決していいものではなかつた。

祖国からは見捨てられ、敵国では捕虜として不当な扱いを受け、そのまま火刑に処された。もしこの時イギリスやフランスで大々的に疫病が流行りでもしたなら、魔女の祟

りだと恐れられたに違いない。それだけ彼女の最期には救いがなかつた。

けれどそれはあくまで、そうだつたら、という仮定の話の筈だ。

ジャンヌ・ダルクは紛れもなく聖人だ。それ以外の事実は存在しない。ムーンセルが記録したという客観的な史実のみがサーヴァントという実像を結ぶというのであれば、そういうふた不確かな虚像が実体を持つ事は有り得ないのでないのだろうか？

今朝聞いたばかりのにわか知識を懸命に並べて、尋ねてみる。するとアヴェンジャーは割とあっさりと頷いた。

「そうね。忌々しいけど、確かに史実として正しいのはあの女の方でしようよ。でもアンタが連れてるサーヴァントと同じように、何事にも例外はあるもんよ。ナーサリー ライム詩集本が人の形を取る場合だつてあるし、ただ珍しくて物凄く強いだけの能力者がサーヴァントに抜擢されることもある。私のこともそういうふた稀有な例外の一つだと思つてくれればそれでいいわ」

心底面倒くさそうに、アヴェンジャーは投げやりに言つた。

なるほど、と頷いておく。彼女との会話はとても参考になつた。

今回の会話で得られた教訓は、「この聖杯戦争において、対戦相手の調査は相当綿密に行わなければ効果はない」ということだ。あらゆる情報を搔き集め、多角的に判断しなければ真名の把握さえ難しい。その事実を実感として得ることが出来たのは大きな収

穫だ。

ふう……どうにか500PPTの買い物に見合うだけの情報を得られたようだ。

「アンタがそう思うんなら、そなんでしようね」

冷たい眼でアヴエンジャーが突き放すように言う。

……オケラだからと足元を見られているような気がするのは、きっと自分の被害妄想だろう。だって背後のアサシンからも「何をいまさら」と、呆れた思念が発せられていいるのが分かる。先程の黒桐といい、この聖杯戦争はちょっと初心者にキツ過ぎやしないだろうか。

なんとも言えない虚しさを抱きつつ、自分達は購買を後にした。

* * *

ワイヤーフレームのみで構成された、殺風景なダンジョンの中を直走る。
ここはアリーナの中だ。

そこには少数の宝箱と多数の攻性プログラムのエネミー達とがおり、前半と後半で二つの階層に分かれているという。前者の方は開ければ中身がそのまま財産に、後者の方は倒せば経験値やアイテム、更には通貨などをドロップする仕組みだ。

そしてアリーナに入れるのは一日一回限りだという。

——ともすれば隅々まで全マス踏破したいと思うのは魔術師として当然の感情で

マツバ

あり、なんというかもう是非もないよネ！

「そんなワケあるか。今日はここまでだ、いいから撤収するぞ」
アサシンに制服の襟首を掴まれ、ずるずると引き摺られる。

今日の成果はエネミーを数体倒し、宝箱を一つ開けた程度だ。多少の資金と、黒鍵と
いう用途不明のアイテムを手に入れたが、それだけである。暗号鍵トリガーマップを入手できないのは
仕様なので仕方ないとしても、後々のことを考えてせめて地図くらいは完成させておく
べきなのではないだろうか。

そう熱烈に抗議すると、アサシンは露骨に顔をしかめた。

「おまえのその地図に向ける情熱はなんなんだ……？　まあいいけど。初日からそんな
に飛ばしてたら後でやることがなくなるだろ？」なにもせずにおまえと二人で何日も
ぼうつとしてるなんて嫌だぜ、オレ。それにこここの敵はもう殺し飽きた」

そう言つて、アサシンは蒼い輝きを灯した玄い眼を瞬かせる。

彼女は英雄ではないが、それでも十分に強力なサーヴァントだ。こちらがマスターと
して不適格なせいで満足な支援が出来ず、フルスペック十分な力を発揮できていない面が多くある
が、それでもこの階層の敵には一度たりとも苦戦していない。

アリーナに入る前に、言峰から支給された携帯端末を介してアサシンの能力には一通
り目を通してある。

敏捷と幸運の値が突き抜けて高かつたのを覚えている。そして彼女は暗殺者の名に相応しく、ナイフを主とした暗器術に長けていた。その戦法を一言で表すならばまさしく一撃必殺である。その清々しい殲滅つぶりときたら、別に自分マスターはいらないのでは？と思わず感心してしまうほどだ。

このペースならまだ行けるのではないか——そう指摘しようとして、思わず口を噤む。よくよく観察してみれば、アサシンの顔色は真っ青だつた。

実際には、言葉ほどの大きな変化は見受けられない。精々が気怠そうに眉根を寄せている程度だ。だが自分には、その僅かな変化こそが不吉に思えてならなかつた。もしかしたら、自分が気付いていないだけで、エネミーから何らかの魔術ヴァイバーズを送り込まれていたのかもしれない。

慌てて立ち上がり、アサシンの小さな肩を支える。大丈夫か、と尋ねると、彼女は面食らつたように硬直した。しかしすぐに我を取り戻し、柔らかい動作でこちらの手を退ける。

「別に。ただの頭痛だ、放つておけばその内慣れる」
治る——ではなく、慣れる？

「そうだ。オレにはあらゆるもの死が見える。構成物質が靈子だろうがなんだろうが、関係ない。ただしこの体じや脳の処理が追い付かないみたいだ……余計な負荷がか

かつて、頭が蕩けそうになる」

熱病に浮かされたように、アサシンは頭を不安定に揺らした。その傍ら、携帯端末で確認した彼女の能力について思い返す。

直死の魔眼。

見るだけで対象となる物体や概念に対し、ソレが内包する死を発現するという魔眼。受容体に過ぎない筈の眼球が有した、能動的な異能。それは遠い昔に存在したケルトの神様以来、久しく絶えていた稀有なものであるという。正直に言つて、初見では全く以つて意味不明だつた。しかしそれがどういうことなのか、実例を目にした今なら多少は理解できるような気がする。

当然ながら死とは本来見えないもの。そんなものを視覚化するには、相応の処理能力が求められる筈だ。けれどムーンセルから与えられたサーヴァントの肉体でそれを成すのは難しい。更には力量不足のマスターがその足を引っ張つているのだから、彼女が背負う負担は計り知れなかつた。

まだ余力があるのだからもう少し探索しておきたい、などと妄言を吐いていた先程の自分を殴りたくなる。

その衝動を精一杯噛み殺して、自分はアサシンに肩を貸した。彼女は不要だ、と眼で訴えていたが、しかしそれに反して文句を言うことはなかつた。そのことに安堵して小

さく胸を撫で下ろしつつ、帰路を急ぐ。

まずは魔術師^{マスター}として、最低限の知識と技能を備えておく必要があつた。この後一度アサシンを保健室に連れて行つて休養を取り、それから図書室に寄ろうと固く誓う。

「…………」

不意に、横から投げかけられる視線に気が付いた。

アサシンは玄い瞳を興味深そうに瞬かせ、こちらの様子を観察している。蒼く爛々と輝く眼に探られているような錯覚を覚え、何故か背筋が凍り、項の骨がシンと軋んだ。どうかしたのか、と自分は問いを投げる。

なんでもないわ、と彼女は笑つて答えた。

それはまるで、面白い愛玩動物を慈悲深く見守るような――美しく、そしてとても怖ろしい表情だった。

* * *

夜中にふと、唐突に目を覚ます。

聖杯戦争の最中――自室として宛がわれた物置は照明が落とされ、暗い闇に包まれていた。閉ざされたカーテンの隙間からも、一筋の月明りすら入り込む様子はない。瞼を開けていようが閉じていようが大して変化のない、完全な闇。その只中で、自分は虚ろに手足を放り出していた。

ぼんやりとした眠気の余韻に浸りながら、意識を失う直前の出来事を思い出す。

確かに自分は図書室で聖杯戦争に関わるそれらしい本をあらかた引っ張り出し、この位置に引き籠った筈だ。アサシンはベッドを、自分はソファをそれぞれの陣地に指定して根を張つていたと思う。……一体、あれから何時間経つたのだろう。

今は何時だろうか、と首を傾げて懐の携帯端末に手を伸ばす。しかし灯りを点けては傍で眠っている——と思われる——アサシンに悪いと思い、やめておくことにした。再び眠気が訪れるまで、大人しくしておくことにする。

さて——だが結局、今は何時なのだろう。もしかして草木も眠る丑三つ時というやつなのだろうか。もしそうだつたら気味が悪いな、と思わず少しだけ眉根を寄せる。

闇を凝視する。

すると、視界内の空間はどんどん輪郭を持ち始めてきた。積み上げられたガラクタが見える。どうやら明かりのない世界でも、目は慣れるものらしい。

溜息を吐いて瞼を閉じようとした所で——その直前に、ぼんやりと視線を横へと投げかけてみた。

誰かと、視線が合う。

それは少女だった。彼女は白い着物を纏つた流麗な佇まいに、淑やかにベッドに腰かけている。その端整な顔立ちは氣怠げながらも、ひどく穏やかで、あまりにも女性的

だつた。

小首を傾げ、少女はこちらを見下ろしている。玄い髪を揺らし、玄い瞳を蕩かせ、少女は妖しく微笑みを浮かべた。

思わず視線が泳いでしまう。そして彷徨つた先で、強烈な赤色が視界を掠めた。

ハンガーポールには、見覚えのある赤い上着が引っ掛けられている。あれはアサシンが着ていたものだ。何故ソレがここにあるのだろう。彼女は、ここにはいないのに。

君は、誰だ？

視線を目の前の少女に戻して、問いかける。

唇が動いたのは自覚できたが、きちんと声を出せたかどうかは怪しかつた。どうやら今日の戦闘で、知らず知らずの内に自分も相当消耗していたらしい。エネミーを相手にしてこれなのだから、サーヴァント戦ではどうなるのだろうかと、先が思いやられた。

少女は笑みを深めて、甘く囁くように——けれど無機的に答える。

「私の中に式と識はもういない——だから、誰でもありません。ここにいる私は、ただのあなたのサーヴァントです。何があつても、どんな命令でも、私はあなたに従うわ、マスター。だって、とても楽しそうですもの」

くすくすと、少女は艶然と笑う。その姿は少女、というよりも更に幼い印象だ。童女、と表した方が近いかもしない。

彼女は無垢な微笑みを湛えたまま、何の気なしに、口を開く。

「実は私、眠らないの。だから今までは、夜はずつと一人きりで。なんだか損をしている
ように思っていたのだけれど……でも、あなたの寝顔を見られるのは役得ね」

もし叶うのなら——あなたの夢の中に現れて、あなたを護れたらよかつたのに。

歌うように、祈るように、少女は滔々と語つた。その声は不思議な響きを持ち、次第
にこちらの眠気を増長させる。自分は頭の向きを定位置に戻し、そつと目を瞑つた。完
全に意識を手放し、昏い眠りの底へと全身を浸ける。

まるで夢のような一幕——その終演の直前に、ふと一つの問いを投げ掛けられる。

——あなたは聖杯に、何を願うのかしら？

ああ……そういえば、考えたこともなかつた。

それについて改めて思考を巡らせる一切の余地もなく、一夜の不思議な思い出を胸に
抱いて、巫条祈荒は眠りに落ちた。

06. ユグドミレニア

聖杯戦争第一回戦——猶予期間モラトリアム、二日目。

特に問題なくこの日を迎えた。寝不足で曖昧に霞んだ頭を抱えて、寝転んでいたソファに座り直す。カーテンは開け放たれており、窓から覗く朝日がささやかに網膜を焼いた。

やはり、頭痛はない。

その事実に安堵しつつ、そつと溜息を吐く。すると、目の前にアイスクリームの容器が突き出された。

「食うか？ 冷たいもの嫌いなんだ、オレ」

見上げると、いつも通りのアサシンの姿があつた。

浅葱色の着物を纏い、その上から赤の革ジャンを羽織つた出で立ち。巫条祈荒と契約を結んだサーヴァントの確固たる姿が、そこにある。

白い着物の童女は、夜明けと共に消えていた。

ありがとう、と礼を言つてアイスクリームを受け取る。

紙の容器越しに指先が冷える。蓋を開け、ビニールの膜を取り除くと、淡い赤色が露

になつた。ストロベリーの甘い香り^{フレーバー}が鼻孔をくすぐる。自分は蓋に備え付けられていたプラスチック製のスプーンを外すと、硬い表面に突き立て、掬い上げた。

冷たい感触を口に含む。

柔らかな甘味が、舌の上に溶け広がつた。

もくもくとアイスクリームを口に放り込む。その度に、少しずつ頭が冴えた。

アサシンには通貨^{PPT}を渡してあつた。

これは彼女がエネミーを倒し、その結果として得た戦利品なのだ。それを何もしていない自分が全額預かるだなんて、恥知らずにもほどがある。なので獲得したPPTをアサシンに渡そうと試みたのだが、なんだかすごく呆れられてしまつた。

——やつぱり、おまえはヘンだ。

なんやかんやあつて、最終的にPPTの取り分は均等に半分ずつ——という結論が出た時に、アサシンはそう零した。割と本気で心外である。実際にこうして買い物をしているようだし、全く無意味な行動ではなかつたとは思うのだが。

まあ、なぜ嫌いなものを買つてきて、それを自分に寄こしたのかは謎だつたけれども。
……ふと、一つの疑問がふつて湧いた。

基本的にサーヴァントはマスターから離れて行動することはできないという。にも拘らず、彼女は夜遅くから散歩に出かけていたようだ。これは一体どういう魔法なのだ

ろうか。

「別にそう特別なもんじやない。オレはサーヴァントとして、単独行動つてスキルをムーンセルから与えられてるだけだ。アーチャークラスのサーヴァントは大体似たようなスキルを持つてる。だからマスター無しでも個別に動けるつてワケ。……それと、別に誰かの言葉じやないけどさ。魔術師が魔法だなんて、気安く口にするもんじやないぜ？」

氣怠げに憮然とアサシンが言う。その瞬間、ポケットに仕舞つておいた携帯端末が律動した。何事かと確認してみると、一件の新着メッセージが届いている。

それはアサシンの開示情報(マトリックス)が解放されたという通知だつた。今の会話でか……と思わず鳩が豆鉄砲を食らつたような心境に陥つてしまふ。なんというか、言つては悪いのが、妙に有難味が薄い気がした。

半ば程アイスクリームを食べ終える。

淡い赤色は半分ほど喪失し、白い容器の底を露呈させていた。歪な半月型——その力タチはなんとなく、昨日見た夢の光景を想起させる。

太極図。

アサシン——君は、聖杯にかける願い事はあるのか？

気が付けば、ふとそんなことを尋ねていた。その後に壮大な後悔が頭を占める。我

ながらひどい失態だ。とても短い付き合いだけれど、そんな質問の答えなんて十分予測できただろうに

予想通りに、アサシンは馬鹿馬鹿しい、と眉を怒らせてしまう。

「願いなんて、そんなものオレにはないよ。聖杯戦争に参加してるのだって、言つてみればおまえの付き添いみたいなものだし。……そういうおまえこそ、聖杯にかける願いは思い出せたのか？」

眼を眇めて、アサシンが尋ねる。自分はそれにどう答えるべきなのだろう。

記憶の喪失は未だ修正されていない。頭の中はがらんどうのままだ。願いがあつたのか、といえばそんなことは分からぬし、願いがあるのかといえば、やはりそんなものもまた自分の中には存在していない。

無様にも無言を選択して、自分はアサシンから目を逸らした。
重苦しい間。

それが空間を満たし、今にも溢れ出そうかという直前に、再び携帯端末のアラームが鳴る。

縋り付くように手に持ったままの端末を操作してメッセージを開き、その内容に視線を走らせる。するとそれと同時に、自分の意識は固く凍り付いた。

テンプレートじみた文言をして、途端に心臓が早鐘を打つ。言峰が言っていた殺し合い——即ち、一騎打ちの相手。それを知らされるという現実に、眩暈がした。

けれどどうにかそれに耐え、残りのアイスクリームを一気に搔き込む。脳の血管が収縮し頭痛に苛まれたが、動搖を消す分には十分な効果がつた。

今の自分に死ぬ気はない。あんな苦痛は、もう二度とごめんだ。

その心持ちだけを維持して、立ち上がる。そして眠たそうに眼を擦るアサシンに外出する旨と、その理由を伝えた。

「へえ——いよいよか」

眼を細め、アサシンが不敵に笑う。そこに感情はない。ただ爛々と輝く、純然たる殺意があるだけだった。

昨日から薄々感じてはいたのだが。彼女は戦いを——殺害を嗜好している節がある。

普通ならばそれを咎めるべきなのだろう。殺人はいけないことだと、そう諭すのが自然だ。けれど今の状況でのうのうとそんなことを言えるほど、自分の頭は呆けていたかった。

行こう、アサシン。

それだけを口にして、物置を後にする。

靈体化したサーヴァントを伴つて、廊下へと歩を進める。早朝ということもあつてか、人気は疎らだつた。

二階へと続く階段を昇り、その先の真正面に取り付けられた掲示板を睨む。そこには見慣れない、一枚の紙が張り出されていた。紙面にはこう書かれている。

マスター：ゴルド・ムジーク・ユグドミレニア

決戦場：七の崩想塔

……誰だ？

思わず呆然と呟く。

予選では耳にすることのなかつた名前だ。といつても自分の知人はあまり多くはない。かつたし、そもそも予選時の名前がそのまま本名とも限らないのだから何とも言い難い。

あの時は一時的に個人情報を削除され、偽りの記憶を擦り込まされていたのだ。ならば世界観を統一するため、名義まで変更されていた者がいた可能性は十分にあり得る

……と思う。

などと考えていると、不意に背後から男の声が聞こえた。

「フン——貴様が私の対戦相手か」

ハツとして振り返る。

数歩離れた所に、一人の男が立っていた。正確な年齢は計れないが、流石に三十代ということはないようだ。

彼はまさしく、自分とは人種から違なつていた。たっぷりと蓄えた金色の口髭と肥満した体型、それを包む洒脱な白い装いは分かり易く俗物的だつたが、しかし彼の碧眼に宿るぎらぎらとした光には目を見張るものがある。程度こそ違えど、それは黒桐の瞳にあつたものと同じ輝きだつた。

どうしようもなく直感する。彼は、本物の魔術師だ。

ゴルドは蔑むように鼻を鳴らすと、踵を返して階段を降りて行つた。

* * *

魔術。

ユグドミレニア。

サーヴァントの有効な運用法。

自分にはまだ分からぬことが多い。なので暗号鍵トリガが生成されるまでの間、図書館で調べ物を——と思ったのだが、どうにもどこから取り掛かればいいのか分かり

辛い。目ぼしいものに片つ端から手を付けてみるのだが、どれもこれもがハズレばかりだ。

どうやら自分には、探偵の才能はないらしい。

本を閉じ、嘆息する。既に数時間も図書室で缶詰めを続いているのだが、目新しい成果はない。どうしたものか……と頭を抱えつつ、手にした本を元の場所に押し込む。そしてその隣にある本を取ろうと手を伸ばすと、指先が誰かの指と重なった。

いつの間にやら、見覚えのある人物が隣に佇んでいた。彼女はぽかんと目を瞬かせた後、こちらを観察するように細める。

「——ふうん。昨日よりはマシな顔付きになつたみたいね」

笑顔でそういうそぶいて、黒桐鮮花はさも当然のように目当ての本を抜き取つた。
……まあ、なんとか人並みには。

目標を失つて彷徨う指を意味もなく開閉させながら、苦笑交じりに返答する。どうにも厭然としない気分だったが、わざわざ上機嫌そうな彼女の気分に水を差す気にはなれなかつた。なんというか、後が怖そうだ。

『賢明な判断だぜ、それ。そいつは怒りやすい上に、バカ力で実力行使する類のヤツだ……どれだけ時代が変わつても、カタチに伴う中身つてのは変わらないんだな』
靈体化したアサシンがそんな念話を飛ばしてくる。まるで彼女とよく似たヒトを

知つてゐるかのような口振りだが……

「——ところで、あなたは何を調べていたの?」

本のページを捲りながら、何の気なしにといった様子で黒桐が尋ねてくる。当然ながら探しものに付き合ってくれる訳ではないのだろうが……なにかしらアドバイスの一つでも貰えれば重畠だろうと思い、素直に話してみる。

すると、彼女は興味深そうに鼻を鳴らした。

「あなたも一回戦の相手がユグドミレニアだつたのね。だから地上で起きた紛争記録を探してたんだ。目の付け所は悪くないとは思うけど……ダメね、これもハズレよ」

速読、というやつだろうか。ひとしきりページを捲つた後、目にした情報を再確認するように目を閉じてから、黒桐は本を棚に戻した。

かつて地上には魔術協会という魔術師が興した巨大な組織があり、神秘の秘匿と研究を行つていたという。しかし地球に満ちていたという膨大な魔力が失われた現在、彼等の存在は地上を支配する西欧財閥とそれに与した聖堂教会によつて解体されてしまつたらしい。

しかし当然、それを良しとする彼等ではない。魔術師達は手を組み、レジスタンスを名乗つて西欧財閥の支配に抗つてゐる。

そしてその組織に属する人員の約半数が、とある派閥に身を置いてゐるのだとか。

千界樹。
ユグドミレニア

神秘が衰退してからも尚、その在り方を保つ魔術師らしい魔術師達。その肩書きは決して軽視できるものではない。

「私もレジスタンスの一員だから、ゴルド・ムジークという名前には聞き覚えがあるわ。魔術師メイガスとしての技術を現代まで維持してきた、数少ない名家の当主よ。こと技術面に関してはあなたじや太刀打ちのしようがないと思うけど……まあ、如何せん人柄とかその他がちょっとね。付け入る隙はあると思うから、まあ頑張りなさいな」

ふむふむ、とメモを取りつつ頷く。

黒桐は教師のようなキリつとした顔で講釈してくれていたが、しかし不意にその表情が曇った。

「……なんでわたしがあなたにこんなこと話してるのはしら」
自分に言われても……。

「そうよね……はあ、わたしもやきが回ったかな。わたしの一回戦の相手もユグドミレニアに属する魔術師なんだけど、それがいかにも『ゲーム感覚でやつてます』って感じで。まともにやつてることちが馬鹿みたいに思えてくるのよね」

愚痴混じりに嘆息する。確かに昨日校舎を巡つてみた限り、そういう手合いの輩は一定数いるようだ。彼等は殺し合いに挑むという自覚に欠けていたし、尚且つ自分が最

後の一人になるまで生き残るに違いないと思いつ込んでいた。

その心構えをどうこう言うつもりはないが……まあ、絡まれたら面倒臭そうだ。

何があつたかは知らないが、ご愁傷様、とだけ労つておく。

「ありがとう。……はあ。もうここまでくれば、毒を食らわば皿まで、かな。親切ついでにもう一つ教えてあげる。この学院の教会に変な生き物が住み着いているらしいわ。どうやらそいつ、訪れるマスター や サーヴァントに対しても工房を提供したり、靈子組成を組み替えて強化を施したりしてゐるらしいの。どういうつもりなのかは知らないけどね。一応、行つて来てみたら?」

ひらりと手を振つて、黒桐は本棚へと視線を戻した。彼女は手近にあつた分厚い書籍を掴み、引き抜く。どうやらこれ以上、彼女に話す意志はないらしい。

自分はありがとう、と黒桐に伝えてその場を後にした。

彼女の言つた噂が本当かどうか、確かめてみるのも悪くない。現状、縋れるものなら

それが例え藁であつても縋るしかないのだから。